

対馬の蜂洞 はちどう

小松 勝助

テレビの天気予報時の長崎県地図では、対馬はどこにかいてあるでしょうか。平戸、五島列島は大体あたり前の位置に描かれています。香岐と対馬は本来の位置よりもずつと南西方向に引き下げて、杵がこいの中に描かれることが多いようです。陸地部分を大きく写すため不要な海の部分を省くでしょうが、この変形地図では距離は無視しています。

変形していない普通の地図上で、対馬と島原と五島(福江)の三点をむすぶと、対馬を頂点に縦に長い二等辺三角形ができ、長崎市はその底辺上にあります。長崎からながめると、対馬は佐賀、福岡をとびこえて遠く北の彼方にあつて、やはり玄界に浮かぶ絶海の孤島です。

その対馬が「中世が生きている」と言われたのは、昭和二十五年(一九五〇)の九学会(考古学、社会学など九つの学会)の合同調査の折の話ですが、いまま歴史や民俗を勉強する人たちは、「対馬は古文書の宝庫」「民俗の宝庫」とい、動物、植物を専攻する人たちは、「大陸系を含め「動物の宝庫」「植物の宝庫」と、野鳥愛好家たちは「アカハラダカなど全国に例を見ないバードウォッチングの最適地」などと様々にいつて対馬を評価します。みな真実を語っているはずですから、それぞれがそれぞれの分野で、十分な成果を上げられることを願うだけです。



日当たりのよい岩かげの根元におかれたハチ洞

このように、人文系から自然系まで

から、在来種としてのニホンミツバチによる養蜂が行われていたということから、考えていいのではないかと思います。

- ◇ 対馬の養蜂について若干の知見を述べておくことにします。
 - ◇ 蜂洞の樹の種類：木質が柔らかく中がくり抜きやすいスギ材が多い。
 - ◇ 蜂洞の大きさ：直径は三〇〜五〇cm、高さは六〇〜八〇cmくらい。
 - ◇ 洞の内径、巢門：内径二八〜三五cm、巢門(入口)は洞下部に縦溝穴。
 - ◇ 空洞の望ましいおき場所：一般的には次の三つに集約。例外あり。
 - ① 南向きの傾斜した山野で、日当たりがよくて暖かそうなおき場所。
 - ② 大岩や大木の根元を背にしていて風雨の吹きこみが少ないおき場所。
 - ③ それでいて適度の木陰があつて、直射日光は長くは当たらない。
 - ◇ 分封バチの捕獲：春さきの四月ごろ洞の内側にミツをぬり、ほのかに蜜の香りが漂う空の洞を、ここぞと思う場所にすえ女王バチを伴った分け蜂の群れが入ってくるのを待つ。幸運にも四、五日で入ることもあるが、入らなければただひたすら待つだけでほかになす術がない。
 - ◇ 蜜源が保たれている対馬の山野：植林は進んではいるが蜜源の花が咲くカシ、シイ、ツバキなどの照葉樹林がまだある。神社の森(社叢)なども大事な蜜源。また山野、里にはツツジやネズミモチ、ヤマザクラ、クズ、クリ、カキ、ミカン、ビワなど二年を通して花が咲く花木も多い。
 - ◇ 山野には雑草も咲きみだれ、ソバの花も貴重な蜜源になる。
 - ◇ ミツ切り：ソバの花の上段が黒くなる九月下旬〜十月上旬まで。
- また、クズの花が咲いたら、ミツを切つてもいいという人もいる。

四

対馬の蜂蜜は、春から秋まで貯蜜期間が長いため巣の中で十分熟成されず。また蜜源植物も花木から雑草の花まで種類も多いので、複数の花の蜜が混じり合つて純度が高く濃厚で独特な風味をもっています。

最後に対馬の養蜂の文化人類学的な意義についてですが、対馬は西洋ミツバチの持ち込みが全くなく、日本ミツバチだけが生息する日本で唯一の楽園で、まさに日本ミツバチのふるさと、王国といえるでしょう。全島いたるところの山野にさりげなく置かれていて誠に素朴で伝統的、そして、野生蜂捕獲技術の生きた化石とでもいべきあの蜂洞に、太古のむかし、先人が身につけた生活の知恵の一端を垣間見ることが出来ます。そしてそれはまた、対馬の素朴な風物詩でもあるのです。

(平成二十四年八月三十日稿、元対馬市小学校長)

多くの分野で研究テーマの豊富な対馬ですが、私は数年前から養蜂の「実験民俗学」ともいべき、ニホンミツバチの捕獲、飼いの勉強、実践に挑戦しています。しかし、見るのとやるのでは大違いで、ハチはなかなか洞に入ってくれません。

対馬に來られた人なら誰でもすぐに目につかれるはずですが、道ばたの小高い丘の上の大木の根元や岩の元に、無造作に丸太がすえてあります。「蜂洞」です。このハッドウは、杉の丸太の中をくりぬいて空洞にし、下部にハチの出入り口を開けます。平石の上にすえ、上部に雨露よけの覆いをし、風で倒れないように重しをのせればでき上がりです。

この対馬の蜂洞に一番早く注目したのは、前記九学会連合調査の折に來島し、この調査全体の世話をした小堀巖氏でした。雑誌「人文」は、調査の翌年昭和二十六年に創刊、二二五ページ全部を「対馬調査」の概報に当てて特集記事を組みました(A5判。本報告書である『対馬の自然と文化』は、昭和二十九年刊でB5判、五七三ページ。報告の内容が正確で詳しく格調が高い名著)。この「人文」の図版の一枚に、「天然の蜂蜜を採取する朝鮮、満州、蒙古などのものと類似している」などと注記した「蜂洞」の写真が掲載されています(小堀撮影とあるも撮影場所は記載がない)。

三

ニホンミツバチは、古くから広く日本列島にすんでいた野生のミツバチで、南はインドネシア、西はアフガニスタンから日本まですんでいた東洋ミツバチの仲間(亜種)で、人類とのつきあいも長く、もともと山野の樹木の空洞部などをすみかとして営巣してきました。

対馬で、いつごろから養蜂が行われたかについてはよくわかりませんが、江戸時代にできた『対州編年略』という本には、継体天皇のころ(六世紀)、「始めて蜜蜂を養う」とあります。文字が十分普及していない時代のことですからそのまま信頼していいかどうかはわかりませんが、対馬でも古い時代

風信

○三月と言えば、三日の節句に始まり、十日の金比羅のハタあげ、お彼岸、桜見物と春の行事は続く。

○戦前は四月三日が節句で、四日は裏節句。五日には床の間の雛人形を早く片づけないと娘の嫁入りが遅れると言われていた。

○「ハタあげ」は長崎の方言で、一般には凧あげと言いますが、長崎のハタは凧とは型も違うしヒードロをつけてあげる。

○長崎のハタあげは、長崎「ぶらぶら節」にも出てくる。ハタあげするなら金比羅・風がしら 帰りは一ぱい気晴で 丸山ぶらぶら プラリプラリと言ったもんだいチュ

○「ハタあげ」については渡辺庫輔先生著の「長崎ハタ考」(昭34・長崎民芸協会刊)がある。参考に読まれるとよい。

○彼岸の語はサンスクリット語のPāṇman Tīraṇa「新阿含経」には到彼岸と訳してあり、悟りを開くという意味であると言う。

○三月四日(月)より次の各講座を開講いたしましたので御自由に御参加下さい(会費不要・資料代各自)

長崎学講座 毎週月曜午前十時三〇分より(講師は各週別)

水曜懇話会 毎週水曜午後二時三〇分より(竹之下・江口・田村・山脇・吉田各氏を中心に)

古文書を読む会(初心者を中心に)第一・第三火曜日午前十時半より正后まで(宮田氏・川原氏担当 越中後見・古文書は主として郷土史関係文書を中心に学習)

長崎食文化サークル 第二・第四金曜日午後二時より(脇山壽子女史を中心に太田氏担当。)

図書だより

『ながさきの空 第二十四集』(本協会創立三十周年記念特集号)発刊

ご希望の方は事務局まで御連絡ください。(無料・送料別)

『中国西域・絲路傳奇』来年一月まで長崎孔子廟に展示されている展示資料の図録で、中国シルクロードの資料多く展示あり大いに参考になった。長崎孔子廟より受贈(中国文物出版社刊・二六〇元)

『続 海峡の風』主として北九州地区を中心に活躍した人物を収録してあり、長崎関係の人物も取りあげられていた。(発刊者・北九州芸術文化財団

二二〇〇円)発刊者より受贈

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 2F

